



ピッポ新聞

2004

6

No.188

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

大型絵本について考えてみる

その3

子どもの本の店 ピッポ 伊藤俊男 様

新緑が目にあざやかな、爽やかな季節になりました。日頃は小社の出版物に格別のご理解とお引き立てをいただきましてありがとうございます。ごさいま

す。さて、ピッポ新聞4月号でお尋ねの大型絵本についての見解に、遅くなりましたがお答えさせていただきます。

『大型絵本について考えてみる』の中で書かれている、「絵本」に対する伊藤さんのお考えには、私ももうなずくことばかりです。

また、長い間幼稚園で「読み聞かせ」をやったこられた方の、「日常的に子どもと、保育者の信頼関係が存在するからこそ、『読み聞かせ』をして貰うことが子どもにとって楽しいと思う」というご意見が紹介されていますが、私どもも同じ思いをもっております。

伊藤さんも最初に書かれておられますように、大型絵本は園の行事(お誕生会など)や図書館などの多人数の子どもたちへの「読み聞かせ」用と考え出版いたしました。

そもそも、大型絵本の企画の発端は、絵本の読み聞かせをしているグループや園現場、図書館などから、「多数の子どもたちに読み聞かせを

したいので、自分たちで絵本の絵を拡大して描いた、大型絵本を作らせて欲しい」という申し入れが、多年にわたりあったことによりです。

しかし、模写では原作の絵のイメージが損なわれますので、著者の作品を守る立場から、小社としましてはお断りをしてきました。しかし、この「絵本を大型にすることはできないか」といった要望は直接著者のもとにも寄せられ、著者からは「元の絵を生かした絵本の大型化の企画を福音館書店は考えてくれないか」とのお問い合わせもありました。また、同じ時期に北海道にある弱視の子どもがいる施設から、大型絵本の製作の要望を受けたりしました。これらのことを機に、小社としましては大型絵本の出版を検討することとなりました。

伊藤さんのおっしゃるように、「子どものとも」の版型で出版した作品を大型化したしますので、拡大することにより、元の作品のイメージを損なうことがないか不安もあり、試し刷をして確かめながら進行了しました。ふつう単純に版を拡大すると、製版時の網点が増大されますので画面は荒れますが、昨今の印刷技術の向上により、オリジナルの作品の質を壊すことなく再現できることを著者、ことに画家の方とともに確かめ、その後全ページの校正刷を見ていただき、了解を得てから刊行に踏み切りました。

製作にあたっては、用紙の調達、製版、印刷、製本について細心の注意と技術を用い、原本との間に差が出ないよう配慮しています。

しかし、もちろんどの作品も大型絵本化が可能ということは考えておりません。大型絵本として出版する作品は、大型にすることで、より迫力や広がりや奥行きが増し、より細部が楽しめる作品というように考えています。今まで著者の皆さまには大型化したことを喜ばれていて、また、著者の方から断わられた作品は現在のところありません。

発刊当時、大型絵本の使われ方は、紙芝居と同じように、ある程度以上の人数の子どもを前にして読まれるものになっていくだろうと考えました。しかし、紙芝居とちがって、読み手にお芝居を求めず、細部にいたるまで丹念に描かれた絵や大画面の迫力のある絵を楽しむことのできる別の質の絵本になるだろうと予測しました。

絵本は、身近なおとなが子どもを膝に抱いて読んであげたり、子どもの傍らで読んであげたりすることを基本と考えています。そこに、園や図書館で、読み手のすぐそばに寄ってきた少人数の子どもたちへの読み聞かせが加わるということになります。園の1クラスくらいまでは、通常の絵本で十分です。これら通常の絵本と、先に述べた、園の行事や図書館で大勢の子どもたちを読み聞かせられることを想定した大型絵本とは、棲み分けができると考えました。

絵本を読んでもらう喜びは、最終的には一対一の関係に行き着くと思えます。大勢

の対象を想定して作られる大型絵本がどこまで浸透していくのか、それにはおのずから限界があると考えます。

しかし、現在、大型絵本は多くの人数の前での読み聞かせ用として定着してきています。図書館、学校、その他さまざまな施設などで利用されています。小学校低学年の教室で、大型絵本が教師によって読まれるとも聞いています。また、前述しました弱視の子どもたちのいる施設からも、子どもたちが絵本の世界を楽しんでいると喜ばれています。大型絵本を読んでもらった体験から絵本の世界に入っていく子どももいます。

小社といたしましては、今後も、図書館、学校、その他施設などからの、大型絵本に対する要望に応えて、内容的にそれに配慮される作品に限って、刊行していこうと考えております。どうかご理解くださいますようお願いいたします。

このたびはお便りをいただきありがとうございます。ございました。小社もよりよい方法でよりよい絵本を世に送り続けたいと願っております。今後どうぞさまざまなご意見をお聞かせいただけますなら幸いです。末筆ながら、貴社と皆さまのご健勝を心よりお祈り申し上げます。

2004年5月11日

福音館書店書籍編集部部長

大和茂夫

ねー、この本読んだ？

『とくべえとおへそ』（桂文我・文田島征彦・絵 1470円 童心社）

上方落語「月宮殿星の都」を元にした落



語絵本 人間のおへそを盗るのは雷と決まっているが、これは逆で、人間のとくべいが、雷から人間が盗まれたおへそを盗み返すという話である。大ウナギを釣り上

げたはずのとくべいが天までつれていかれ、雷のまつり見物をしたりと、奇想天外な話が展開していく・・・。

『シドニー行き714便』（エルジェ・作 川口恵子・訳 1680円 福音館書店）



タンタンの冒険旅行19 タンタン一行はシドニー行きのジェット機からトランジットでジャワ島に降り立った。そこで、大金持ちのカレイドスさんから、

自家用ジェットに招待され、自家用機に移ったのだが、またまた事件に巻き込まれてしまう。古代遺跡や、空飛ぶ円盤などが登場してくる楽しい冒険物語

拝啓

福音館書店書籍編集部部長 大和茂夫様

「ご回答いただいたことを嬉しく思います。それから、時間的理由だったとはいえ、先月号(5月号)の「ピッポ新聞」において、ご返事が無いことを取り上げ、結果的に失礼を生じたことをお詫び申し上げます。

回答書を拝読させていただきました。

これを、「ピッポ新聞」6月号冒頭に全文掲載させていただきましたが、それは4月号の「ピッポ新聞」紙上で大和さん宛に公開質問状の形をとらせていただきましたので、回答もピッポ新聞紙上で公開させていただきます。ここで、回答に対する疑問点・再質問や、ぼくの意見を述べさせていただきます。

大和さんは回答書で、

大型絵本は園の行事や図書館など多人数の子どもたちへの「読み聞かせ」用にと考えて出版(傍点筆者)いたしました。

と述べておられますが、ぼくの知る限りでは「読み聞かせ」専用と用途を規定して出版された絵本は、これまで無かったと思います。福音館はこの大型絵本で絵本の新ジャンル(?)の開拓をめざしたもののな

でしょうか?

当店にみえるお客さんのなかに、時どき「歯磨きが大嫌いな子が好きになるような絵本ありますか」とか「うちの子ニンジンが食べられないのですが、食べられるようになる絵本ありますか?」などという質問をされる方がいらつしやいます。が、「読み聞かせ」専用と大型絵本を作った大和さんは、こんな場合どう答えるのでしょうか?

「読み聞かせ」用の大型絵本は、「歯磨きが好きになるための絵本」と質的に全く同じ類の本(実用のための絵本)だと思えてなりません。もし、この考え方が間違っているとお考えならば、新ジャンル絵本の、もつと積極的な出版意図をお聞かせ願えませんかでしょうか。

しかし、大和さんは、こうも述べておられますね。

絵本は、身近なおとなが子どもを膝に抱いて読んであげたり、子どもを傍らで読んであげたりすることを基本と考えています。そこに、園や図書館で、読み手のすぐそばに寄ってきた少人数の子どもたちへの読み聞かせが加わるということになります。園の1クラスくらいまでは、通常の絵本で十分です。

このお考えに、ぼくも全く賛成です。「読み聞かせ」とは、まさにこういうことだと思っております。

子どもにとって、身近で、なおかつ大好

きなおとなに絵本を読んでもらうことほど嬉しいことはありません。そのことがあらゆる意味で、その子が育っていく上で、好影響を与えるであろうことも想像に難くないことです。

「読み聞かせ」についてこのようにお考えの大和さんというより福音館が、どうして大型絵本を作って販売しているのでしょうか、このところがどうしてもぼくには理解できません。

そもそも、絵本の「読み聞かせ」を、わざわざ大型絵本を使って、イベントなど多人数の子どもが集まる場所でやる必要があるのでしょうか?

知り合いの幼稚園の先生たちは、こう言っていました。毎日、子どもに絵本を読んでいるから、わざわざ多数の子どもを集めてイベントとして大型絵本を使った読み聞かせなど、考えたこともないし、考えられないことだと。

いえ、誤解のないように!

なにもぼくは、保育園や幼稚園独自でおやりになることに「そんなことはくだらないからおやめなさい」などと言う気は毛頭ありません。その園独自で楽しめばいいのです。

子どもたちは絵本を読んでもらった後で、その絵本の内容を共通認識にして「ごっこ」の世界で遊びを発展させる事がよくあります。同じような意味で、大型絵本(紙芝居)を先生と一緒に作ったりして、絵本の世界を二次的に遊ぶことはむしろ素晴らしいこ

とだと思えます。

この場合の「大型絵本」は、いわゆる絵本とは違い、どちらかと言えば遊びの道具として考えれば良いのだと思えます。

だから、原作のイメージがどうたらこうたらなどは、野暮というものです。

ぼくの考えでは、日常的に(日課として読み聞かせが子どもの生活の一部になっている)読み聞かせをやっている保育の現場では、大型絵本などは必要ないのです。

さらに問題だと思うのは、

そうそう、大和さんはこうおっしゃっています。福音館が大型絵本を作った動機として「多人数の子どもたちに読み聞かせをしたい」という幼稚園や図書館などからの要望があったからだ。

本来は、絵本の読み聞かせとは少人数で子どもとの信頼関係の中でやるのが本当であるが、保育者から要望があったから、専用に大型絵本を作ったというのが福音館の出版理由であるというのですね。

「保育園から要望」問題は「こ」なのです！

(このところは、ちよつと小声で) 大型絵本が保育の現場にほしいなどと言う保育者は、日常的に子どもに「読み聞かせ」などあまりやっていないからこそ言えることだと思えます。

さらに言えば、こういう人は、ご自身が絵本を余り楽しんだことがない(絵本を理

解していない)のではと、思えてなりません。

4月号で、冗談半分に(多分に揶揄の意味を込めて)福音館は「ピーターラビットの絵本」を大型化してくれという読者からの要望があったら、大型の「ピーターラビット」を出版するのかと書いたのですが、大和さんの回答を読んで、ひよつとしたら、本当に作ってしまうのではと、心配になってきました。(まあ、それも自由ですが)

こう書けば、すかさず大和さんは反論なさるでしょ。回答書でも

もちろんどの作品も大型絵本化が可能ということとは考えておりません。大型絵本として出版する作品は、大型にすることで、より迫力や広がりや奥行きが増し、より細部が楽しめる作品というように考えています。

と書いておりますものね。

今回、大和さんの回答書を読んで、最もお聞きしたかった点の一つがここです。

既に12冊の絵本を大型化していますが、この12冊は、どのような基準で選んだのでしょうか？

この12冊は評価も定着し、子どもたちにも支持され続けている絵本ばかりです。当店でもほとんどの作品は、開店以来(今年

で26年目ですが)の定番の絵本で、常に店に置いて、品切れさせたことがないものばかりです。今後もそうしようと考えています。

なぜそれを大型絵本に？

ぼくには単純に有名な絵本だから大型化し、そのネームバリューで売ろうと意図したとは思えません。でもね、小林旭の流石歌のように「むーかしの名前」で、出て「います」ではだめだと思えます。なぜこの12冊だったのかを教えてください。

また、これからも大型絵本を出してゆくとおっしゃりますが、読者のためにも、大型化する福音館の基準というものを次に明らかにしていただけませんか。

さらに、大和さんは、大型絵本化することによって迫力がまし、細部を楽しみることができるようになったと主張していますが、言葉だけでなく、もっと具体的に語っていただけませんか

作品名を挙げて、その作品のこの部分が原本よりもこういう理由で、絵本の迫力がましとか、画面が大きくなったことで、このように細部がより楽しめるようになったという、説明をお願いいたします。

それでなければとうてい、大和さんのご意見は説得力を持ちません。

次に、大和さんは印刷技術についても述べられていきますね。

製作にあたっては、用紙の調達、製版、印刷、製本について細心の注意と技術を用い、原本との間に差が出ないように配慮しています。

もとより、印刷については、全くの素人ですから技術的なことはよく分かりませんが、素人なりにこう考えます。

大和さんは原本と差が出ないことを強調していますが、原本と大きさが何倍も違うのだから、差が出て当たり前だと考えるほうが自然なことだと思います。原本と差がないようにする努力ことは、無駄なことではないのですか。

大型絵本は、原本と同じではあり得ないのですから、初めから別作品であることを目指すべきです。

この絵本を印刷した精興社は、自社のホームページ上で大型絵本の技術を誇っていますが、印刷技術的に誇れたとしても、絵本の本質とは別のことだと、ぼくは感じました。

少々くどいのですが、ぼくがあくまで**今回問題にしているのは、「絵本」とは、**ということなのです。

今度は、福音館が出版した別の絵本を例にとつて質問したいと思います。

先年、福音館は創立50周年記念というこ

とで、コールデコットの16冊の絵本を完全復刻いたしました。その折り、全国の子どもの本屋を集めて、その説明会をなさいました。ぼくもその場に出席させていただきましたが、そのとき、担当者は今度出版する福音館の刷り見本と、以前、ほるぷ出版がオズボンコレクションとして復刻した数冊を比較して、今度の福音館の刷りの方が良いことを説明しました。たしかに福音館の印刷の方が、数段良いと感じました。

このときです！ぼくが福音館の絵本というものに対するこだわりや、姿勢がどんなものであるかを感じたのは。(何も印刷が良かったことを言っているではありませんよ)

絵本の善し悪しで言うならば、そのとき見せていただいた、本物(原本・百年以上前の木口木版で刷られたトイブック)のほうが、古書的な美しさも含めて、復刻より比較にならないほど良かったのですから。

あたりまえのことですよ。江戸時代の本物の浮世絵と美術印刷の浮世絵を比較するのと同じようなものですから。

余談ですが、このとき見せていただいた木口木版のコールデコットの絵本の素晴らしさに感動したことが、要因の一つとなつて、その後、ぼくはネット上で子ども本の古書店を開くことになったのです。

このコールデコットの復刻を通して福音館は、絵本の素晴らしさを伝えようとして

いるのだと思つたのです。

言い換えれば、絵本は、形も中身も含めたすべてが、芸術であることを、復刻することではめしたかつたのではないのでしょうか。原本をそのまま復刻することで、そのことが伝わりと考えたのではなかつたのですか。(大きさを換えようとは、爪の先ほども考えなかつたことだと思います)

コールデコット自身は「線は少なければ少ない程、犯す誤ちもすくない」(「絵本の魅力」吉田新一著より)と言っていたそうですが、この言葉こそ、絵本画家といわれる人たちが、郭線一本描いたり、削つたりすることにどれほど真剣に取り組んでいるのかを物語っているのだと思います。

画家のこだわりは、ときには微妙な刷り色であったり、使用する紙であったり、インクであったりもするのだと、以前、福音館の編集者から伺つたことがあります。

画家は絵本を読む子ども目の位置や、目線なども当然意識して描くのだと思います。画面の大きさ(絵本の大きさ)は、かなり大切な要素だと想像できます。

こどものとも傑作集の版型を前提に描いた絵が、その数倍に拡大された場合、絵の質が変化しないと考える画家がいるものなのでしょう。コールデコットを例に挙げてもいいことではないでしょうか。

さらに、読者である子ども視点でこのことを考えてみましょう。

読んでもらう子どもには、傑作集の大きさの絵本で感じたものと、大型絵本で感じるものは全然違うものだと思いますが、大

和さんはこの点をどうお考えになられるのでしょうか？

おおぜいの子に、ただ見やすいようにと単純に大型化しただけかもしれませんが、大型化は、絵本の質を全く変えてしまう問題だと思えます。

絵本を簡単に大型化してしまう福音館と、コルデコットを復刻した福音館とどちらが本当の姿なのでしょうか？

大和さんの回答書を読んでいて、ぼくは子どもの頃の「1粒で2度おいしい」というグリコキャラメルのキャッチコピーを思い出しました。昔ですから、グリコのキャラメルなど滅多に食えなかったのですが、子ども心に、確かにグリコキャラメルは「1粒で2度おいしい」かったのです。

でも、この福音館の大型絵本は子どもには「1粒で2度おいしく」はないと思います。5月号で北海道のMさんが寄せてくれたご意見の中で、「初めはモノ珍しさで見ている子もあつたとおもいますが、今では、見かけません」と言っておりませんが、これが何よりの証拠だと思つたのです。

どうやら、大型絵本で「1粒で2度おいしい」のは子どもではなく、おとな(福音館・著者・保育者・ごともとも社・本屋)なのだと思います。そこでは、絵本のことと、読者である子どもが忘れ去られているのだと、強く感じました。

長々とまとまりもなく、稚拙な文を書きました。続きは次回に回して、このへんで今回は筆を置きます。
貴社のますますのご繁栄と大和さんのご健康をお祈り申しあげます。

ピッポ 伊藤俊男

インフォメーション

「子どもの本を語る会」

この会は、毎年一回児童書の出版社の編集者と静岡県子ども本研究会の会員や、親子読書などと取り組んでいる人たちが、子どもの本について語りあうもので、今年は27回目になります。

とき 6月26日午後1時～4時

ところ 御前崎市立図書館

参加費はいりませんが、事前に申し込んでください。

大会事務局森口 0543(45)6809

遊本館 054(256)0150

詳細もこちらに問い合わせてください。

さとうち藍さんを囲んで

現在、さとうちさんは毎号雑誌サライ(小学館)に「徒然」庭仕事」を連載していますが、取材の折りのこぼれ話や、ご自分

の岩手の山の家での自然とのふれ合いなどを時々メールで知らせてくれます。これが面白いのです。それをぼく一人だけで楽しんでいるのはもったいなので、みなさんにもお裾分けしようと思ひ、今回の集いを思い立ちました。

丁度、たくさんのふしぎ(福音館書店)8月号の「種採り物語」がでるのを機会に、静岡にきていただけることになりました。

今回は講演会という形式よりも、さとうちさんを囲んで、身近で話を聞く会にしたいと思っています。

手作りのケーキやお茶(紅茶・コーヒー・ハーブティー)も用意する予定ですから、さとうちさんと「おしゃべり」タイムも楽しめると思います。

こんな企画ですから、参加人数は三十名に限定させていただきます。

とき 7月17日(土)午後2時～4時

ところ アイセル 3F アトリエ

参加費 一人1300円(ケーキ・お茶付き)

なお参加は、今回はおとなの方に限らせていただきます。お申し込みはピッポまで

さとうち藍さんの主な著作

「冒険図鑑」「自然図鑑」「園芸図鑑」

(以上福音館書店) 「くだもの王国」

(岩崎書店) など

*今月の「ばあやのお話か」はお休みします。